**読書ノート　その21**

2018年9月23日　小林

前回は、(1)作田啓一「恥の文化再考」にもとづき、日本は恥の文化ではなく羞恥の文化であること、(2)兼子盾夫の論文にもとづき、キリスト教の原罪と親鸞の罪の意識の比較論を紹介しました。また付録として、日本陸軍の精神主義の由来、および特攻の論理は武士道の曲解であるとの私見についても紹介しました。

今回もひきつづき、恥と罪について報告します。

1. **井上忠司「世間体の構造－社会心理史への試み」（講談社学術文庫、2007年12月、原本1977年刊）**
* 著者は京大院博修了、甲南女大・奈良女大教授、他。著作「まなざしの人間関係－視線の作法」「家庭の風景－社会心理史ノート」「風俗の社会心理」等は日本文化に関係し面白そう。
* 日本人は世間で恥を表現する。「世間体が悪い」「世間の笑いものになる」など。だから日本人は世間・世間体を気にする、つまり世間が言動の基準になっている。それでは、「世間」とは何か？
* まず、農民の世間を考えると、それはムラ社会、その構成員は親族血縁・昔なじみ、この中では世間体を気にする必要はなく、恥は農民の感情ではない。一方、武士は名を惜しみ面目を重んじる。武士道からくる体面意識。これは武士特有のものであり、恥は武士の感情。江戸期以降、農民町人に浸透した。
* 武士の体面意識には主従という上下関係があり、その世間は主君を頂点とする家臣団。一方、農民町人の世間は仲間とのヨコの関係。それでは、ヨコの関係はどこまで伸びて、どこまでが世間か？
* そのカギは、ウチとソトの概念。中根千枝によれば、日本人は「場」を共有する集団への帰属意識が強く、属性を共有する集団への帰属意識は弱い。日本人は場の集団をウチと意識し（家庭をウチといい、会社をウチの会社という）、その仲間どうし密度の高い関係を築く（職場の仲間でゴルフ・飲み会、部下は上司にお歳暮お中元を贈る）。これはつまり「ミウチ・ナカマ」である（第一カテゴリー）。
* 第二カテゴリーは、第一カテゴリーを取り巻く形で「知り合い」がある。
* 第三カテゴリーは、さらにそのソトにあり、これは「ヨソの人」。これが「世間」である。
* 米山俊直（京大教授）「日本人の仲間意識」（1976年）によれば、日本人の最重要の社会関係はナカマであり、日本はナカマ社会である。以下のように日本の社会関係を分類している。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 非血縁的関係 | 血縁的関係 |
| 大集団 | セケン・世間 | ハラカラ・同胞 |
| 小集団 | ナカマ・仲間 | ミウチ・身内 |

* 土居健郎は、甘えの関係でミウチとタニンの関係を説明している。(1)親子は無条件でミウチ、甘えの関係が濃厚、つまり人情の世界、遠慮不要、(2)世間ではタニンどうしでも親子的な関係が成立すると甘えが許される、たとえば良好な上司部下の関係、つまり義理の世界、遠慮がはたらく、(3)人情も義理もおよばない世界、つまりタニンの世界、遠慮不要なので「旅の恥はかきすて」になる。

世間

タニン

* 世間の目は顔に集中するので恥をかくと顔＝面子を失う。「面子を失う」は個人に使われ、「外聞が悪い」は家・ムラ・会・党などの集団に使われる。この感情が恥であり、日本の文化になっている。
* これにたいし、日本人の罪の意識は、中村元（仏教学・東大教授）によれば、相対的な善悪基準にもとづいている。すなわち、絶対的・普遍的な善悪基準ではなく、人倫組織の現況に適しているか否かがそのまま善悪基準になってしまう傾向がある。つまり、日本人の道徳観は自己との現実的かつ人間的なつながりに重きがおかれる。たとえば、受験勉強のため部活動を辞める場合、他の部員を裏切るような気持ちになり、罪の意識をもつ。（我思うに、会社で「キレイごとばかり言っていても利益は出ないっ！」という現実重視、と「あいつの提案なら賛成してあげよう」という属人主義に通じる道徳観ということか。）
* さて、ルース・ベネディクトのいう日本は恥の文化という主張にたいしては、批判が多い。

(1)彼女は世界の文化を恥と罪で単純に二分化し、罪の文化を上位に置く意識が見える。この考えを補強したのがM.ウェーバーいうところの「プロテスタントの倫理」。

(2)罪は内面的制裁で良心の呵責を伴う、人の目がなくても自制心がはたらく。恥は外面的制裁を伴い他者に笑われる。しかし、罪には罰が与えられ、これは外的制裁。罰はしつけ・教育で心に植え付けられてはじめて内面化する。一方、恥は世間という外的規範に反しない言動をとらせるが、日本ではこの外的規範をしつけ・教育で心に植え付けて内面化している。彼女はしつけ・教育による内面化に気づいていない。

(3)さらに彼女は羞恥心に気づかなかった。これはのちに作田啓一が指摘した。日本は恥の文化ではなく、羞恥の文化であると。

(4)日本にも仏教の影響から罪の文化がある。上記で中村元が指摘しているごとく。

* 以上の議論を踏まえ、井上は以下の図を示す。(a)~(e)で解説。
* (a)公恥－行為主体の自我理想とくらべ自己を劣位者と認識し、他者のまなざしを介して所属集団から孤立していると思ったときに感じる恥の意識。

(b)私恥－自我理想とくらべ現実の自己が劣位者と認識されたとき自己をあたかも他者が自己を見つめるかのごとく見つめられることにより一人ひそかに感じる恥の意識。

(c)羞恥－自己の所属集団と準拠集団とのあいだに認知志向のズレが生じ、他者のまなざしを介してそのズレが意識されたときに感じる恥じらい。

(d)普遍的罪－自己の心の中の別の自分が自己の所属集団からの逸脱者として認識されたときに感じる罪の意識。

(e)個別的罪－自己の心の中の別の自分がやってはいけない事をやったと所属集団から逸脱者と認識されたときに感じる罪の意識。

* 最後に、世間体の今日的な意義を確認しておこう。

(1)世間体は日本人の意思決定のあり方に影響を与えている。つまり、他者のまなざしを伺いながら他者の期待に同調していく過程の中で自己の意思をしだいに固めていこうとする。欧米の個人主義では自分の意見があって、そのうえで他者を説得する。方向性が逆。（我思うに、佐々木さん報告の岡本浩一のいう心理学の「同調」について、日本人ほど同調しやすくかつ同調を重んじる人間はいないのかもしれない。）

(2)世間体を気にすることを古い習慣だと否定すると、自我が確立されていない場合には、他者に見られていなければ何をやってもよいと考える傾向になりやすい。

(3)山崎正和（関大・阪大教授）の見解によれば、日本の伝統芸術は「社交の芸術」、たとえば万葉の和歌は貴族が宴席で歌を競い合うという社交芸、句会は町人等が集まって俳句を競い合った、日本画には他者が賛（お褒めの言葉）を書き入れる習慣がある。つまり、他人の評価を気にする芸術。絶対的な美を追求するのではなく。これは、世阿弥（1363-1443年）のいう「離見の見」という能における奥義に通じる。離見とは観客から演者を見たときの見え方であり、この観客からの見え方を演者自身が見なければいけない、ということ。つまり、自己の演技を他者の目を介して客観視すること。このように、他者の目を気にする文化は単に他者に迎合する文化ではなく、芸術においてすばらしいものを創り出した。

1. **平岡聡「業とは何か－行為と道徳の仏教思想」(筑摩選書、2016年10月)**
* 著者は京都文教大（浄土宗系）の教授兼学長。
* 「業」（ごう）とは「おこない」の意味（古代インド語でカルマン）。自業自得＝自分のおこないは自分で得る、つまり自分に返ってくる。仏教は、自己責任が大原則。仏教では人間の過去のおこないが現在のその人を作っていると説く。現在が悪いのは過去の悪い業が原因と考える。これを宿業という。
* 業思想は輪廻思想とむすびついた。まず、輪廻とは、六道（りくどう）、すなわち天・人・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄の六つの領域を輪廻すること。これを六道輪廻という。なお、阿修羅は「戦闘好きの鬼」（Fighting Ghost）、餓鬼は「飢餓にさいなまれる鬼」（Hungry Ghost）、地獄はサンスクリット語でナラーカ、これが音写され奈落となった。意味は地獄。この輪廻は業思想とむすびつき、生前の業の内容により生まれかわる領域が変わると説いた。悪をつつしみ、善をすすめた＝勧善懲悪。（そういえば、多くの歌舞伎やその他の物語は勧善懲悪をテーマにしており、これは仏教の影響なのですね。）
* なお六道は、三界のうちの欲界に属す。三界とは欲界・色界・無色界をいう。(1)欲界は六道に分かれ、(2)色界は四つの禅に分かれ、禅は多数の天に分かれる。これは四禅を修めた者が死後生まれかわる世界。(3)無色界は非想非非想処など四つの処に分かれる。非想非非想処は非想非非想天ともいい、物質から離れた衆生が住む最高の世界、これを有頂天という。
* 大乗仏教はブッダの死後四百年ほどたって生まれたが、大乗仏教の思想は自業自得の考え方に修正を加えた。(1)一つは自利利他円満・自利即利他の考え方である。これは自分の利益のみならず他人の利益をも願うことである。単なる自己責任ではなく、他人の利益も考える大きな乗り物、つまり大乗である。(2)空の思想が自業自得の考え方に変更をせまった。さて空とは実体がないことであり、実体がないのは縁起しているからである。コップは飲みものを入れるという条件を縁としてコップとして存在する。これが縁起であり、別の縁起によればそのコップは花瓶にもなり、ペン立てにもなる。したがって、コップに実体はなく、空である。そうすると、自分のおこないも縁起により他者が受けることができる、つまり自業**他**得。これを廻向という。自己の善業を他者の善業として廻向するのである。
* さて、縁起をどう理解するか。四ヶ条あり、すなわち四法印。(1)諸行無常－原因によって作られたものは常にあらず、(2)諸法無我－存在には永遠不変の実体がない、(3)一切皆苦－ (1)(2)を正しく理解しないかぎりすべては苦である、(4)涅槃寂静－(1)(2)を正しく理解すれば心の安らぎが得られる。
* 大乗仏教における縁起の理解は、上記の四法印にそって、空間的に縁起を理解する面が表に出てくる。つまり、私という存在は他者とのかかわりを縁として生起するので、私の行為は他者に影響を与え、逆に他者の行為が私の存在に影響を及ぼす。自業自得の考え方に大きな修正が加えられ、大乗仏教は社会的宗教の面が表に出てくる。
* 大乗仏教の社会性は護国・鎮護国家思想に表れている。大乗仏教の経典である金光明経や仁王般若経は、国王がこれらの経典を重んじ、六波羅蜜を実践し、正法をもって政治をすれば国家は安泰となると説いた。なお、六波羅蜜とは、悟りの世界に至る六つの修行のことであり、布施・持戒・忍辱（ﾆﾝﾆｸ）・精進・禅定(ｾﾞﾝｼﾞｮｳ)・智慧(ﾁｴ)である。(解説省略)
* ここでは、国王の役割がきわめて大きいが、国民一人一人の善なる共業(ともに善いおこないをすること)も大切。
* 日本においては、日蓮(1222-1282年)は「立正安国論」を著し、正法に立脚すれば国家は安泰となると説いた。さらに臨済宗の開祖・栄西(1141-1215年)は「興禅護国論」を著し、持戒は禅法そのものであり、持戒の人がいれば諸天はその国を守護すると説く。同じ構図で護国思想を説いている。大乗仏教の社会性を表す思想である。
* 業を分類するに、三業あり。すなわち、意業・身業・口業。それぞれ意思・身体的行為・言葉を表す。最重要は意業。意思なければ身体的行為も言葉もないのであるから。
* 意思は心に宿る。インド語で心はチッタcitta。チッタの語源は「積む」の意味のciだとの説あり。なぜ「積む」が心になるのか。業の積み重ねが心を形成すると考えれば、「積む」が心になることが理解できる。このように考えれば、自分が日々おこなう一つ一つの業をおろそかにすべきではない。
* 次に、善の懺悔ということについて。善いおこないをしたときにこそ、それが本当に善いことだったのかを考えるべき、ということ。なぜなのか。
* 弁護士・中坊公平の著書にのっていた実話。森永ヒ素ミルク中毒事件で訴訟代理した女性被害者から弁護士報酬として五千円を差し出された。そのとき中坊は「金儲けでやっているわけではないから報酬はいらない」と言うが、その被害者は納得せず中坊はとりあえず五千円を受け取った。中坊はその五千円でその被害者の子どもにプレゼントを贈った。その後、その被害者に会ったとき「先生は、私たち貧乏人のお金はもらってくれないんですね」と言われた。中坊は被害者を上から見おろしていたことに気づき暗澹たる気持ちになった、とのことである。
* 最後に、現代社会の身体性の欠如について。解剖学者・養老孟司は現代を脳化社会と呼んでいる。現代社会は人間の脳で考えられたものに満ちあふれている。公園の木々は自然物だが、その配置は脳で考えられている。さらに脳は身体を予測可能なものとして管理規制しようとする。脳は性と暴力をきびしく規制する。なぜなら性と暴力は身体性を顕著に象徴するものであり、脳に対する反逆が明白であるから。しかし脳は必ず自己の発生母胎である身体によって最後には滅ぼされる。だから脳は予測不可能な死をタブー視する。
* 最後に、いじめ問題にたいして心の教育が主張される場合があるが、わたしはこれを間違いとは思わないが、身体が忘れられていることに違和感を覚える。仏教は意業を重視するが、人間の行為として身体を離れて意業の居場所はない。心の教育と同時に身体の教育も忘れてはならない。早寝早起きや朝食を食べる等の習慣を身に付けることでいじめ問題の多くは解決するのではないだろうか。

以上